

ピアス

sanukisoba

彼の様子がおかしいと気付いたのは、夏の暑さもようやく落ち着き始めた9月の中旬だった。何がおかしかったのかと言われても、それを具体的に指摘することはできない。ただ、漠然と、様子がおかしいと気付いただけ。結論から言ってしまえば、そのとき私は彼の浮気に気付いたということになる。

結婚の約束をしていた彼は、私が就職して2年目の冬に友達の紹介で知り合った人。優しく、それでいて頼りがいのある人。考えてみれば私以外の女性が興味を持つのも当然な人。自虐的な言い方をすれば、私と付き合ってから3年間、1回も浮気したりしなかったのがおかしいくらい魅力的な人だった。

でも、それは過去の話。現在の現実の彼は私以外の女性と付き合い、そして私はフラれようとしている。

彼の様子の変化に気付いたのが12月の中旬、それは浮気なんだと確信したのが2月の下旬、そして3月も半ばにさしかかった今日、私はきっとフラれる。彼が私を家に呼び出したのは、きっと別れを告げるためだろう。

通い慣れた道、乗り馴れた電車、見慣れた乗換駅、そして彼の家。もうこの道を歩くことはないんだろうな、と思うとちょっと感慨深いものはあったけれど、不思議と涙は流れなかった。別れるのは寂しい。でも、どこか冷めた感じがしているのもまた、間違いない。

それはきっと、彼の浮気相手が、私の親しい人だから。

彼の浮気相手を知ったのは、ただの偶然からだった。2月も終わりに近づいたその日、仕事の関係で遅くなった私はいつも使わない駅でタクシーを待っていた。朝から降り続ける雨がやまず、タクシー乗り場で疲れてうつむきながら傘をさして立っている私の耳に、彼の声が飛び込んできた。

最初は似てる声だな、というくらいにしか思わなかった。それはきっと、その声とやり取りをしていたのが若い女性の声だったということと、その女性の声もまたどこかで聞いたような声だったということも影響しているのだろう。

だから私は、よく似た声だなという程度にしか思わず、自然とその声の主を目をやった。傘をちょっとだけ持ち上げるようにして。

そして目に入ってきたのは、彼の姿だった。間違いなくそれは彼そのものだったし、その彼と仲睦まじく腕を組んで歩いているのもまた私の知っている人だった。それもよく知っている人。

思わず顔を隠すように傘を降ろした私に気付くことなく、私の知っている2人は改札の中へと消えていった。そのときの私は、ショックを受けたというよりもどうしたらいいかわからず、ただただ平静でいること以外にすべきことが何もなかった。

彼女は、私に恋人がいることは知っている。でも、その恋人が誰かまでは知らない。お互いそういう話をあまり好まないということもあったし、私が彼と交際を始めた頃にちょうど彼女が恋人と別れてしまったので紹介するタイミングを逸してしまったという事情もある。

そういえば、最近彼女は彼氏ができたと報告してきていた。去年の12月くらいだったはずだ。あれは私の彼のことだったのね、と家に向かうタクシーの中で私は妙に落ち着いていた。

彼女が私の彼を奪ったという事実は、さほど私を苦しめなかった。私は彼のことが好きだけど、同じくらいに彼女に親しみを抱いている。だから彼が私を捨て、彼女を選ぶというのであれば、それで2人が幸せになれるというのであれば、それでいいんじゃないですかと思ってしまう。可愛くないなと自分でも思う。

いや、素直に言おう。腕を組んで歩く2人を見たとき、私は彼に対する愛情を一瞬で失った。彼と付き合っていたいと思わないし、結婚したいと思えない。たしかに結婚まで考えた相手だったけど、それを一瞬でなかったことにするくらいには私はもう彼のことを愛してはいない。冷たい私。

でも、私は彼女に対してはそこまで嫌悪感を覚えない。幼い頃から一緒に育ってきた仲だし、たとえ彼を捨てても一緒にいるべき相手だと思っている。それにきっと、彼女に罪はない。12月に報告してきたとき、彼女は「彼はこの数年間ずっとフリーだったんだって」と言っていた。そして先月くらいには「彼は結婚も考えてくれてるの」とまで。悪いのは私の彼。彼に対する未練がまったくないのはきっと彼のそういった一面を知ってしまったからというのもあるだろう。ただ、そういう男だということを彼女に教えない私はもしかしたら、ちょっと嫉妬をしているのかもしれない。

彼の家に向かう私の耳で揺れているピアスは、そういえば彼女にもらったものだったな、と気付いたのは彼の家の前に立ったときだった。何も考えずただただ気に入っているというだけの理由で選んだピアスだったけど、なんて皮肉なんだろうと私はちょっと笑いながら合鍵でドアを開ける。合鍵を使った最後の瞬間。

部屋の中で待つ彼はいつもと同じ表情をしていて、それだけを見ればこのままだけでも通り話をして、お茶を飲んで、ご飯を食べて、そして寝る、そんな一日になりそうな雰囲気ですらあった。

でも、もちろん、そんなことにはならなかった。

いつもと同じように、ベッドの窓側に私が座り廊下側に彼が座ってはいるけれど、いつもとはまったく違う話を彼は切り出した。

「別れよう」

たった一言で彼は今までの関係も、いつか一緒に住もうと言っていた未来も放棄しようとしていた。いかにも彼らしいといえば彼らしい。私も別に未練はなかったし、わかった、とただ一言伝えればそれで十分だった。「どうして?」とか「ほかに女できたんでしょ」とか、言おうと思えば言えた台詞もなぜか面倒くさくなってしまって、どうでもよくなってしまった。こんなくだらない話で私の時間を奪ってほしくなかった。

わかったとだけ言った私に拍子抜けしたのか、彼は少し反応が遅れた。そのちょっとした遅れの間に、私は自分でもよくわからない行動に出てしまう。

「お願い、最後に一回だけ抱きしめて」

今でもなぜ私がこんなことを言ったのかはわからない。そのときの雰囲気と、それまでの関係と、期待された展開とが相互に作用して私を動かしたのかもしれない。

「結婚まで考えた相手だもん。捨てられるにしても大事に捨てられたいの」

そういう私を見て今度は彼が「わかった」と呟く。

初めて異性と交際し始めた高校生のように複雑な顔をして、でもぎこちなさのない仕草で、私と彼はベッドに腰掛けたまま強く抱き合った。

いつものように、彼の方に私はあごを乗せる。そして耳元でささやく。「私はずっと変わらないわ」と。

その台詞をどう解釈したらいいのか戸惑った彼は、それに答えることなく、そのかわり私の背中にまわした指に力を込めた。

大好きな可愛い彼女と付き合うために、邪魔になった女とうまく別れることができ安堵しながら、別れる女を抱きしめる彼はどんな顔をしているのか。それが見れなかったのが残念と言えば残念。

彼の体からはなれ「ありがと」と言うと彼はトイレに立った。無言のまま。

彼はいったい何を思っていたのだろう。

何も言わない彼に、その日初めて私は嫉妬を覚えた。ちょっとした、軽い嫉妬。あなたたちの愛情が強固なものなら、きっとこれくらいのこと何でもないわよね。

そう思いながら私は、右耳につけていたピアスをこっそりベッドの下に放る。きっと、可愛い彼女と引っ越しするころ私のピアスに気付くでしょう。あなたの大好きな彼女が私にくれたピアス。彼もよく、似合ってるよと褒めてくれたそのピアス。それを見つけたとき彼はどんな顔をするだろう。そんなことを思うと微笑んでしまう。

「帰るわ」

トイレから出てきた彼に合鍵を渡しながらかを履く。そして一度も振り返ることなく私は家に戻る。

左耳に残った片方のピアスをジュエリーケースに入れる。半分失くしてしまったら、役に立たないものがこの世には存在する。このピアスは、彼女に悪いけれどもう役立たずのピアス。つけることはもう、二度とないのだ。

あれから2ヶ月ほどが経った。

夕飯を食べながら妹が「お姉さん、そういえば最近あのピアスつけないのね」と聞いてくる。

「そうなの、どっかで落としちゃったみたい。ごめんなさいね、あなたからのプレゼントだったのに。申し訳なくて言い出せなかったの」